

学位論文審査結果の要旨

博士課程 ①・乙	第 号	氏 名	遠藤 公彦
審 査 委 員		主 査 氏 名	河上 洋
		副 査 氏 名	星田 嘉弘
		副 査 氏 名	佐藤 裕之
[論文題名] Risk factors for atrophic gastritis in the Japanese young and middle-aged: a study using double-contrast upper gastrointestinal barium X-ray radiography.			
[要 旨] 本論文は 50 歳未満の若年齢層の萎縮性胃炎に着目し、胃 X 線造影検査における萎縮性胃炎所見の割合を検討した。対象 351 例のうち 24 %に萎縮性胃炎がみられ、胃 X 線造影検査における萎縮に与える因子を検討した結果、多変量解析では血清ヘリコバクターピロリ (HP) 抗体のみが有意な因子として抽出された。 本結果は、若年齢層において胃 X 線造影検査も萎縮性胃炎の診断に有用であることを明らかとした。 学位審査時の質問事項として、 k 係数の計算方法、多変量統計解析の方法や解釈について質問があった。また、主査および副査より、HP抗体以外の感染診断法が行われていないこと、偶然除菌などを含めた偽陰性の取り扱いについて、X 線造影検査の読影結果の一致率は高いものの萎縮の評価方法は最終的には病理学的所見を確認する必要があること、本研究は萎縮のみに焦点を当てているが内視鏡検査では食道や十二指腸病変の有無も評価していること、胃癌の高い危険因子である鳥肌胃炎に関しても未検討であること、などが指摘された。 いずれも、本審査に関する不明な点を詳細に説明し、本研究の正当性を説明した。健診で重要なことは胃癌の発見率や胃癌死亡率の抑制効果であるが、本研究では未解決であった。今回明らかにした研究結果をもとに、X 線造影検査で精査扱いとなった場合は最終的に胃内視鏡検査による精査となるため、内視鏡検査を第一選択とするべきであるが、胃 X 線造影検査は医療従事者の人員や検査室の状況に応じて内視鏡検査との棲み分けが可能となるとの将来展望を述べた。なお、出席者はおよそ10名であった。			

最終試験結果の要旨

論文博士 甲	第 号	氏 名	遠藤 公彦
審 査 委 員	主 査 氏 名	河上 洋	
	副 査 氏 名	黒田 嘉紀	
	副 査 氏 名	佐藤 裕之	
[要 旨] 論文内容、審査会での発表内容および質疑応答について審査し、最終試験は合格と判断した。			